

巻頭特集

弱点を強みに変えて、人気水族館を生み出す

水族館プロデューサー

中村元さん

「おかしいと思ったら、自分で変えてきた」。「水族館プロデューサー」という日本でただ一人の肩書を持ち、幅広い分野で活躍している松阪市出身の中村元さん。鳥羽水族館や新江ノ島水族館、サンシャイン水族館など、それぞれの個性を生かし、多くの人を楽しませる展示を発案してきた。



取材場所となった伊勢夫婦岩ふれあい水族館シーパラダイスのプロモーションを1年半前からサポート。従業員は当たり前だと思っていた「柵がないふれあい」を武器に知名度を上げてきた

故郷・嬉野が育んだ自然への愛着と考え方

「天空のオアシス」「生きている水魂」「ニッポンの水族館」……。どんな水族館なんだろう」と、ワクワクするコピーは、全て中村元さんがプロデュースした水族館のテーマだ。まず初めにどんな水族館にするかを決めてコピーをつくるという。

「水族館プロデューサー」という自身の肩書も同様。「プランナーでも館長でもない、水族館全体をどう動かしていくかを考えるのが自分の役割だと思ったからね」

1956年、二志郡嬉野町(現・松阪市)に生まれた中村さんは、本が大好きな子どもだった。親が教師だったため、家にはたくさん本があったという。図鑑や絵本などあらゆる本に

夢中になり、小学校に上がると、学校の図書館で大量の本を読み漁った。「自ら外で遊ぶような子どもでもはなかった。けれど、周りに1人や2人は、自然の中で遊ぶのが上手い友達がいちもんでしよう。その子たちに誘われて遊びに出かけるのが好きでしたね」。故郷・嬉野は、川と山、そして田んぼといった豊かな自然に恵まれている。

ある日、「遊びのプロ」である友人と地元・天花寺付近の中村川に出かけた。「彼らは私に水の中の魚を見せたかったのでしよう。初めて水中眼鏡をかけて潜ったんです」。しかし、中村さんは魚ではなく、川の流れる白い泡の筋・浮遊感、ゆらぎといった水中の世界に感動した。その頃の思い出が、後の水族館づくりにつながっている。

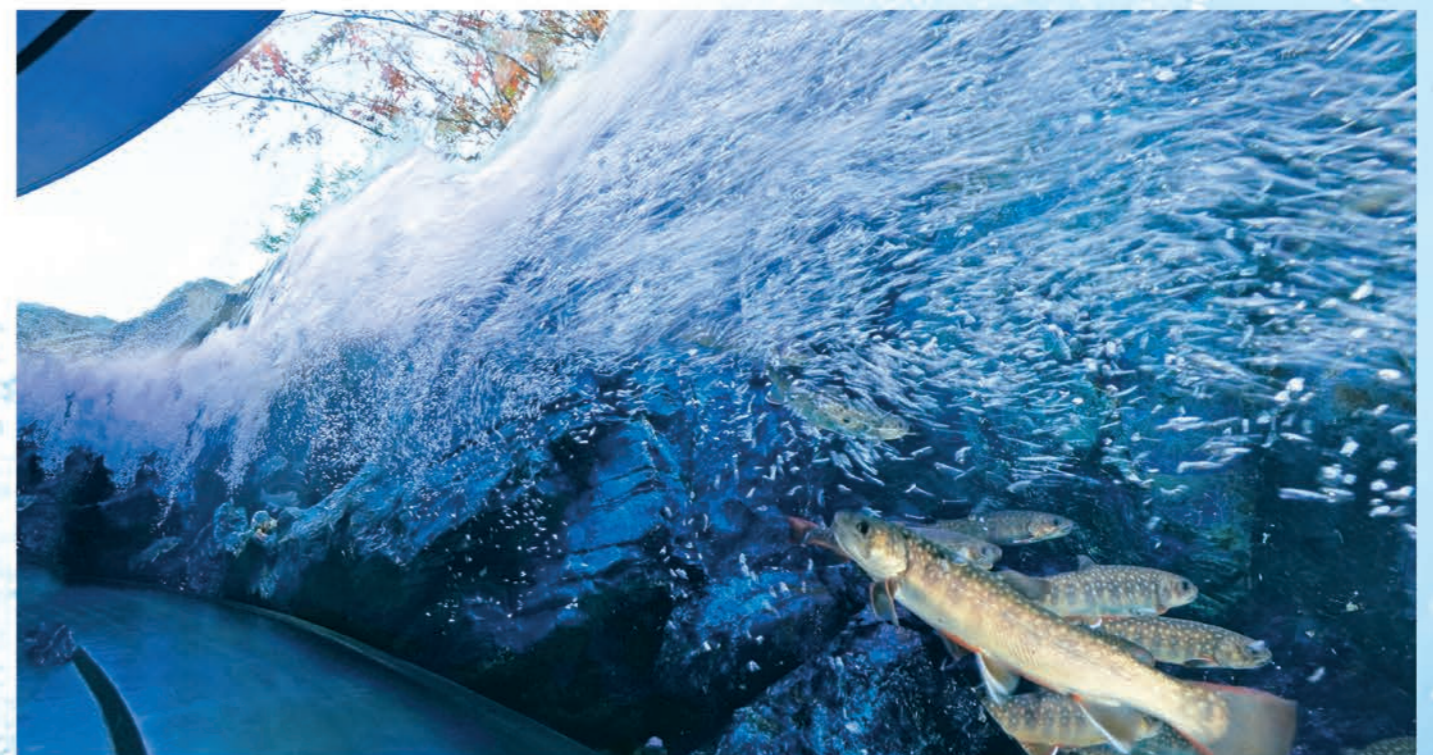
「自分にしかできない働き方」水塊と生物の命を見せる展示

1980年、縁あって鳥羽水族館に入社。文系出身の中村さんは、生物に対する知識不足に悩んだ。「大学でマーケティングを学んでいたため、自分にしかできない来場者の目線で見える働き方を考え始めました」。解説板をしっかりと読む人は少ないこと、飼育員が当たり前と思っ

ている生物の習性が面白いことに気付いていった。中村さんの水族館プロデュースには、「水魂」というキーワードが必ず出てくる。「岩やサンゴを置くだけではダメ。奥行きや広がり、冷たさ、浮遊感全てを「水魂」と言っています」。それは、手掛けた水族館には必ず設置している「川の水槽」に顕著に表れている。「日本の川は、水族館では受けられないといわれています。でも魚がジャンプしたり、水の下で生活が見られるならどうでしょうか。先日は滝つぼを下から眺める水槽もつくりました。魚がなぜその環境で生きるのかを伝え、「人間もそこにある環境の中で生きている」と伝えるのが、水族館の使命と感じています」

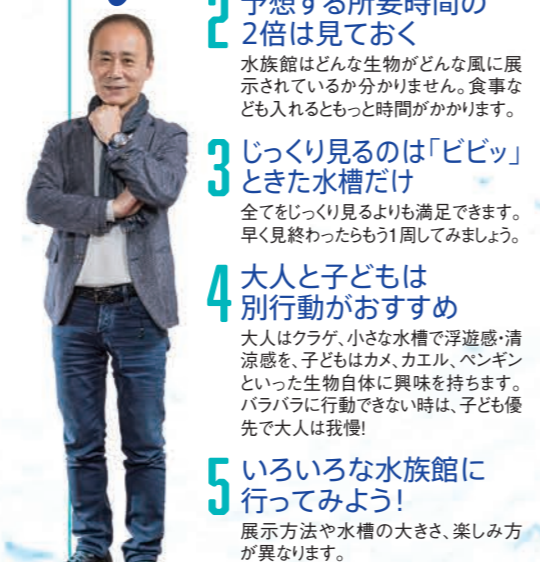
水族館がメディア露出に対して受け身であることも問題視。当時、この水族館にも広報担当部署はなかった。大学のサークル活動で培ったビデオ制作や撮影技術を生かし、スナメリの出産シーンやラッコが貝を割るシーンなどを撮影。東京や大阪の出版社やテレビ局に送り続けた。

昨年、広島県のショッピングセンターに開業したマリホ水族館。激しい流れから生まれる景色とともに、自然の中で生物が暮らす様子を展示している



中村元さん直伝!「水族館の楽しみ方」

人によって見方は異なりますが、いくつかポイントを紹介!



1 地図(フロアマップ)を手にする

絶対観たいところはチェックしておきましょう!一から見ていくと後半にパテテしまうことも。

2 予想する所要時間の2倍は見ておく

水族館はどんな生物がどんな風に展示されているかわかりません。食事なども入れると時間もかかります。

3 じっくり見るのは「ビビッ」ときた水槽だけ

全てをじっくり見るよりも満足できます。早く見終わったらもう1周してみましょう。

4 大人と子どもは別行動がおすすめ

大人はクラゲ、小さな水槽で浮遊感・清涼感を、子どもはカメ、カエル、ペンギンといった生物自体に興味を持ちます。バラバラに行動できない時は、子ども優先で大人は我慢!

5 いろいろな水族館に行ってみよう!

展示方法や水槽の大きさ、楽しみ方が異なります。

Profile

中村元

[なかもら・はじめ]

1956年、三重県二志郡嬉野町(現・松阪市)生まれ。1980年に株式会社鳥羽水族館に入社し、アシカトレーナー、企画室長を経て副館長に。2002年に退社し、日本初の「水族館プロデューサー」となる。日本の大衆文化にすることを天命と見え、道楽と位置づけたトークライブや水族館ガイドの編集、学芸員への講師としても積極的に活動



「水族館の人間だからこそ、撮れる映像。飼育員が当たり前の光景も面白い場面がたくさんあるんです」

1980年代以降、中村さんが全国初の広報担当部署を開設した鳥羽水族館は全国ネットのテレビ番組でたびたび登場し、たくさんの方が足を運ぶようになった。インターネットがつかない環境のなか、「インターネットが次のメディアになる」とウェブサイトもいち早く開設した。

機転の利いた発想で大人がよろこぶ水族館を

手掛けてきた水族館は、「桁に及ぶ」「立地が最悪だったり、スペースに限りがあったり」とそれぞれの弱みを強みに変えていく。一般的な水族館にしても大規模な施設には勝てませんからね」。

「サンシャイン水族館」は都会の屋上という立地を生かして、空飛ぶ

ペンギンやアシカが見られる「天空のオアシス」を実現。北海道の「北の大地水族館」では、「世界初の凍る水槽」として氷の下の魚を展示した。

すると客足の伸びなかつた厳しい冬に多くの人が訪れるようになった。「水族館は子ども向けであるという共通意識を変えて、大人向けにするんです。圧倒的に人口が多いのも子どもを連れてくるのも大人ですからね」と笑う。大人こそが「水中にいるような感覚」や「やすらぎ」といった「水魂」を求めているのだ。

中村さんの意思を引き継いで水族館を成功させる弟子も現れた。現在は15年前から取り組んでいる「バリアフリー観光」の後継者づくりを模索中。「バリアフリー観光」とは、移動に困難な人でも行きたいところ、楽しみたいことを実現するためのまちづくりだ。伊勢神宮では今年から、「おもてなしヘルパー」がスター

ト。境内の景観をそのままに、ボランティアのサポートによってバリアフリーを実現している。

「今年で62歳。いろんなことをしてきたから、そろそろのんびりしてもいいのかな。これからは自分がいなくてもできる環境を整えなければならぬ」と、東奔西走してきた中村さんはほほ笑む。故郷・三重県については、「アクがない。豊かな地域だと思います。どこかの県でも山や海、湖はある。でも三重県のものが一番うまい!豊かな自然があれば、文化が育ち、人柄にも豊かさがでる。三重弁も日本で一番優しい言葉だと思おう。いい言葉、いい町を大切にしてください」と返ってきた。

水族館を皮切りに、日本の大衆文化そのものを変えてきた中村さん。今日も多くの人がその気遣いに触れ、笑顔を見せているだろう。